世田谷村日記

石山修武

一月十五日

六時四〇分起床。家内は昨夜旧外務省研修所の建築保存シンポジュームの記録テープおこしで徹夜した様だ。どうやら建築の保存に関しては男性よりも女性に直観的に理解されるような気がする。私も保存に関しては自分を納得させ、なだめている段階だから。私の組み立てようとしている修理論、つまり開放系技術論の一部はどうやら保存論に回収される可能性が高いなコレハ。仕方ないか。

今日は十時から地下打ち合わせ。檜垣をひろしまハウスの現場担当者にしよう。プノンペンを着実に現場で動かしてゆく工夫をしなくては。打合わせは延々三時まで続き小休止後再び夕方六時まで。非常に疲れた。毎日新聞佐藤健突如来訪。宗柳で食事。十時眠る。

一月十六日

朝四時半起床。いくら何でもこれでは早過ぎる。ミカン二ヶ喰って又寝る。春はやっぱり何とか時間をやりくりして佐藤健とシルクロードへ行かねばと決めた。佐賀のワークショップを少し早めに移せることができると良いのだけれど。九時真栄寺の馬場昭道から電話あり佐藤健の健康状態に関しての心配である。生老病死は誰も逃れる事が出来ぬ絶対的宿命であるが友人の病を介して私もその現実に対面する方法態度を身につけていかなくてはと痛感する。今日から杉浦康平や龍谷大学学長とシルクロードのスケジュールを調整すると言っていたから、そちらを優先するように工夫してみる。何人かの友人達の顔を思い浮かべてそれぞれ八〇才くらいになった顔と姿を想像してみる。それぞれ皆枯れ切らぬ相貌である可能性が高い。余程こちらも力を蓄えておかぬと附き合い切れぬであろう。附き合い切れずに野辺の枯木になるのも無念である。六〇過ぎてからの友人達何がしかの先輩方との附き合いには余程の力が必要である。心しておこう。研究室に行って若干のスケジュール調整。夕方近藤理事長と会食。

一月十七日

六時半起床。ラテン系の国々の産業構造のリサーチに関して、いきなりラテン系では解りにくいだろうから、ここは易しくイタリアのデザインビジネスについてという事にしよう。平山を事務局に小さな研究会を立ち上げさせる。ひろしまハウス通信は坂口に本格的な勉強というものがあるのだ、という事を先ず教え込まなくてはいけない。今のままでは浅瀬を泳ぐメダカのままで終わってしまう。アジアモンスーン文化について勉強させよう。具体的にはウナロム寺院の歴史にまで辿り着かせる。沢山な事を一度に言って解る連中じゃないから地下では今日はこれだけを指示しよう。

松浦武四郎の一畳敷きの書斎については案の定すでに鈴木博之が歴史的建造物の保存・活用・開発をめぐって「現代の建築保存論・王国社」で触れていた。短文ではあるが言い尽くされている様な気もしてしまう。案の定なんではあるが何故か面白くないんだよなあ。泰山荘の武四郎のスケッチにつけられた二行のキャプ

ションも適確で十九日に予定しているＩＣＵ行が何だか辛くなってしまった。雪でも降ってくれれば中止だ。

保存論に関して勉強し直す必要があるな。開放系技術論の一部は保存論に回収されてしまうかも知れないという予感はどうやら、これも案の定である。嫌な予感はいつも当たるのだ。鈴木博之の単騎独行もすでに予想以上の拡がりを持ちつつあるんだな。要注意である。案の定であるが要注意である。佐賀のワークショップでのラスキンの講義録も読み直してみよう。

研究室でカンボジアで撮影のフィルム見る。上手くとれているのと全く駄目なのが半々くらい。しかも大事な写真が全滅である。ライカをハンマーでぶち壊してやろうと思う位の無念さである。何が間違ったのか、やはりシャッタースピードのところに出ていた赤印に留意すべきであった。α社長若松氏来室。六時半より中川、佐藤両先生と学科内の打合わせ。アンコールワット修復チームの一人が交通事故で亡くなったそうだ。中川先生少々疲れ気味であった。佐藤さんと今年から実験的に作ろうとしている複合スタジオに関して意見交換。考えてみれば十一年大学にいて佐藤先生と話らしい話をしたのは初めてなんだから大学ってのは不自由極まるところだ。この複合スタジオは成功させたい。早稲田で出来ることは実に少ないから。